前橋文学館報

萩原朔太郎記念　水と緑と詩のまち

No.11 1999.3

第十一回文学館講座〈創作シリーズ〉「初心者のための楽しい俳句教室」（要約）

この文章は、平成11年1月30日～2月27日まで行われた第11回文学館講座の内容を当館報のために中里先生に要約していただいたものです。

中里麦外

皆さんこんにちは。これから五回にわたって創作講座を行いますが、前半の三回は、俳句の基礎とその作り方について学習し、後半の二回は、実際に句会を行うことによって句会のやり方を学び、俳句の楽しさを知っていただければと思います。

俳句の歴史については、（一）「〈俳句〉以前―俳文芸の深層―」と（二）「近代俳句の誕生とその展開」という二つの観点からアプローチすることができます。

「俳句」という言い方は、正岡子規が、明治二十五年に新聞「日本」に入社し、新俳句運動のキャンペーンを張り出してから一般化したものです。それまでは「俳諧」（俳諧之連歌）と言っておりました。「俳諧」の発生とその性格は、その後の俳文芸の深層を規定し、現代俳句を創作する場合の、重要なキーポイントを成しているのではないか。

「俳諧」の特質を何にもとめるかという問題は、大変むずかしいことですが、とりあえずここでは「唱和性」に擬定しておきたいと思います。もともと「俳諧」という言葉自体が、「俳」は神を地上に降ろす〈降神〉の力を意味し、「諧」は〈コトバ〉によってその神々と共生する力を意味したと考えられるからです。

「記紀歌謡」を見ると、イザナギ・イザナミの男女二神の掛け合い＝唱和というものが、ものを生み出す原動力となっております。それを「ウタ」の発生と言ってもいいでしょう。

「唱和性」の文芸的特質は、いわば〈唱和〉それ自体の感情的抵抗を契機としているところにあります。

平安時代の文芸様式として定立した短歌形式は、人間中心主義の発生とその確立を意味しました。やがて、唱和性のゆりもどしが連歌形式を生み、さらに俳諧の連歌へと展開していった。「俳諧」発生の根拠は、コトバの分節化を背景として、表現の自由への欲求や、伝統・典型の排除をもとめた時代の精神にあったと言うことができます。

俳諧は、「ウタの戯作趣味」として発生したと言ってもいいかもしれません。俳諧の誕生は、ある意味で「和歌」との別れを意味したわけですが、「俳諧は

和歌の一躰なり」と認識していた芭蕉によって、戯作趣味としてのレベルの俳諧は、はじめて和歌の正統を引く芸術としてのレベルへと高められたのです。

子規によって出立した近代俳句は、かつて人間中心主義の表現としての短歌が、共同体の表現としての古代和歌から自立したように、近世俳諧から独立し、近代的自我の表現としての詩型となったのでした。子規は、俳諧の第一句目の句＝発句をそれ以下の句から独立させ、これを〈俳句〉と言いました。その目的の一つは、近世俳諧的な共同体の共通の感性からの脱却にあったわけですが、その結果、〈一句単体〉の詩型となった〈俳句〉は、孤独な詩型の〈負性〉を負うことになりました。その後の近代俳句の歩みは、ある意味で、その〈負性〉をどう克服し、本来の〈唱和性〉をどう回復するか、ということが創作上の隠れた命題となって今日に至っているということができます。

●なかざと　ばくがい
昭和18年、前橋市生まれ。伊勢崎市在住。
相葉有流門。「石人」主宰。上毛俳壇選者。群馬女子短期大学名誉教授。文学博士。
上毛文学賞・村上鬼城賞・群馬県現代俳句協会大賞・群馬県文学賞各選考委員。
現代俳句協会新人賞・現代俳句協会評論賞受賞。
著書に、句集『吹虚集』、句集『阿含』、句集『九鬼』、句集『遊楼羅』、『村上鬼城の研究』（群馬県文学賞受賞）、『村上鬼城の基礎的研究』、『長谷川零余子―人と作品』、『相葉有流―人と作品』、『村上鬼城―解釈と鑑賞』（上毛出版文化賞受賞）ほかがある。
現在、日本現代詩歌文学館評議員。日本文芸家協会・現代俳句協会・俳文学会各会員。群馬県俳句作家協会副会長。

近世俳諧と現代俳句は、どう相違し、どうかかわっているか。いま、芭蕉と金子兜太の作品をあげながら検証しておきたいと思います。「秋深き隣りは何をする人ぞ」（芭蕉）の句は、死を一旬後に控えた作者の深い孤寂の境地が、ものなつかしく詠われています。この句は、西行法師の「さびしさに堪へたる人のまたもあれな庵ならべむ冬の山里」の歌に和そうとして生まれた〈唱和〉の句であります。「人体冷えて東北白い花盛り」（金子兜太）の句は、苛酷な東北地方の歴史の中で死んでいった死者たちが、作者の歴史体感において甦ったことを詠った作品と言えましょう。生のダイナミズムや対象そのものを直接の主題としない作句の態度や方法がよくあらわれております。芭蕉俳句の正統は、こうした兜太の現代俳句へと引きつがれていることに注目したいと思います。

さて、次に、俳句はどう作ったらよいのか。また、俳句という詩型を語る場合、ある程度理解しておくことがのぞましい事柄というものがあります。いまここでは、「季語」「17音律」「切れ字」「文体」という四つのキーワードをとりあげます。

〈季語〉の成り立ちとそのはたらきについて理解を深めることは、大切なことです。〈季語〉の胎動は、『万葉集』の「冬ごもり春さり来らしあしひきの山にも野にも鶯鳴くも」という歌において認められます。しかし、〈季〉が主題として体系立てられた

アンソロジーは、四季の部立を持つ『古今和歌集』をはじめとします。それを〈季語〉の発生と言ってもいいでしょう。

中国詠物詩の影響は、〈ものの見方〉としての「風雅意識の発生」につながり、季的発想の深化は、〈ものの本意〉としての「本意意識の発生」を促したのでした。〈本意〉とは、〈心の様式化〉と言ってもいい。様式化された心が、〈美〉を生むのです。「梅に鶯」という取り合せをよしとする美意識は「梅が枝に来ゐる鶯春かけてなけどもいまだ雪は降りつつ」(『古今集』)の歌の美とイコールだからです。

平安末期から中世にわたって隆盛した連歌の時代に入ると、題材そのものの季語化が進み、さらに連歌的自然観＝連歌的本意が、深まっていきました。〈季としての発句〉の性格が定着し、これがやがて、俳諧の連歌における発句の季語化へと結びついたのです。挨拶性としての発句の季語化が深まると、〈季語〉は、飛躍的に拡大し、俳諧的自然観＝俳諧的本意が形成されていったのでした。

〈季語〉は、「本意形成機能」と「季節指示機能」という二つのはたらきを持っております。従って、恋・旅・名所・離別等々、一句のうちで本意形成機能を詩的に備えたものを主題とするとき、〈季語〉を必ずしも必要としない句が存在します。芭蕉はこれを「無季の句ありたきものなり」(『去来抄』)と言っております。そうだとすれば、現代俳句は、現代にふさわしい新しい俳句的本意の発見と創造がもとめられていると言えましょう。

〈俳句〉は、なぜ「17音律」を基本とした詩型なのか。この問題に答えるには、日本語の音律的性格と定型音律としての七音と五音(休止拍)の意味を理解する必要があります。日本語は、二音を基調とし、二音一律拍を一単位として四律拍一句(八音)をベースとした言語的特質をもっています。これをいま日本語の〈打拍〉とすれば、定型音律としての七音や五音は、いわば〈休止拍〉をかかえた内部構造で成っています。この〈休止拍〉の存在が、結果として「変化と統一感」「句法の自由」「リズムの切れ」「打拍破綻の防止」といった〈休止拍効果〉を生むのです。

また、五・七・五音律の〈片言性〉は、俳句本質論としての〈滑稽〉の根拠となり、その詩型の不完全性は、いわば残欠の美という俳句形式の魅力と深くかかわっているのです。

俳句と言えば「や」「かな」「けり」といった「切れ字」を用いた作品が多い。「切れ字」という〈技法〉は、不完全な音律としての俳句形式を克服し、あらたなる創造を実現する力をもっています。「切れ字」には、「俳句内部構造の強化」「イメージの重層化と客観化」「屈折・整調効果」などのはたらきがありますが、何といっても「切ろうとする意志」こそがもっとも肝要です。芭蕉は、そのあたりの消息を「切字

に用ゐる時は、四十八字皆切字也。用ゐざる時は一字も切字なし」（『去来抄』）と言っています。

俳句の〈文体〉は、多種多様であります。あたらしい独自な文体の創造をめざすことは、むろん無意味なことではないでしょう。そしてそれは、作品の〈推敲〉へのたゆまざる努力の中から生まれることが多い。

後半の二回は、句会のやり方の概要について学習し、句会を実際にやってみましょう。

十名から三十名規模の〈学習句会〉を行う場合の、一つのモデルを示すと次の通りとなります。

《句会の流れ》

作品制作　当季雑詠当日持寄り（二句）

←

作品提出　短冊型用紙に作品のみ記入し、提出する。併せて作品控え用紙に、自分の全作品を記入し、提出する。

←

全作品清記　清記担当者が、作品を清記用紙に記入する。清記後、番号を附し、句会指導者を第一番として時計廻りに配る。

←

選句開始　句会指導者を中心にして、選句済み清記用紙は右おくりに廻す。

←

選句終了　選句用紙に記入し、提出する。

←

披講　披講担当者が選句を読み上げたら、当該作者はそのつど名のる。最後に、句会指導者の選が披講される。

←

選評　句会指導者または句会運営幹事から指名された者が、選評を行う。

←

講評指導　句会指導者は、作品批評を通して句会を指導する。

〈句会〉は、作句をテーマとした事上練磨と深い和合の心に裏づけられた交流の場であります。共生の思想とその実践を深める句会の精神は、民族のいのちとわかちがたく結びついて離れることはないのです。

今回の創作講座が、次のステップへとつながる力となることを祈っております。皆さんの熱心な取り組みにはおどろきました。心から感謝申し上げます。ありがとうございました。